忘れないあの日のこと

戸邊　優希

僕は海釣りがとても好きで、小学四年生までは、祖父母としょっちゅう松島や塩釜に出かけていました。時には知り合いの船に乗せてもらい、沖に出て、釣りをすることもありました。あの魚がかかった時の感触、磯の香り、潮風、波の音、今でも時々、あのころを思い出すことがあります。

僕があんなに好きだった海釣りに行かなくなったのは、二年半前の大震災からです。沿岸部を襲った大津波は漁港や建物、船や車まで、町ごと一気にのみこみました。

僕が住む大崎市は、内陸部だったので、津波の被害は免れました。余震が不気味に続く中、僕の家では電気がストップし、その日から家族や地域の方と手を取り合っての生活がスタートしました。スーパーに何時間も並んでようやく手に入れた食料品。近所の人に分けていただいた牛乳や米。逆に僕の家には井戸があったので、井戸の水を近所の人たちに使ってもらいました。僕は、大変な時こそ、人は助け合い、支え合って生きていくのだと強く感じました。

地震発生から一週間ほどたって、電気が復旧し、僕の家も周りの家も少しずつ片付いてきました。その頃になってようやく、東北の沿岸部が大津波に見舞われ壊滅的な被害を受けたことや、たくさんの犠牲者が出たこと、そのことがどんなことを意味するのか僕にも考えられるようになってきました。

「あの家大丈夫だったかなぁ。」

「生きてんのかなぁ。」

祖父母のこのような会話がたびたび聞こえてくるようになったのも同じころでした。そのたび僕の心の中に一人のおばあさんが浮かびドキンッとしました。そのおばあさんの息子さんの紹介で知り合った僕は海釣りに行くたびに家によっていました。そのおばあさんは、八十歳をこえてなお、カキの養殖の仕事に携わっていました。僕は海のことを沢山教えてくださったおばあさんが無事であってほしいと願っていました。

そんな時、おばあさんの息子さんとようやく連絡がとれました。そしておばあさんが無事だったことや今はその息子さんの家に夫婦で避難していることがわかりました。

「良かった、良かった。」祖父母と僕は、この言葉を何度も何度も口にしていました。

おばあさんと電話で話すことができた時、僕はどうして助かることができたのか聞いてみました。おばあさんは「昭和の地震の時も津波がきた。今回もきっと津波がくる。」そう思ってゆれがおさまった後、すぐに逃げたそうです。海から数十メートルのところにあった自宅は津波によって全壊に近い被害をおったと話す時の声のトーンは低く元気がないようでした。でも最後は

「家もカキも大変なことになっちゃったけれど、いつまでもくよくよしてられない。復興しなくちゃね。」と話されたのです。僕は驚いてすぐに言葉が出ませんでした。震災の後、電気がストップして不便とか、買い物に行っても並ばないと買えないとか、そういうことが一番大変だと思っていた自分には、想像も付かない出来事が起こり、おばあさん達沿岸部に住む人や、働く人の日常をあっさりと奪っていったのです。一番苦しんでいるはずのおばあさんの口から「復興」の二文字が出るなんて信じられませんでした。僕がこのような体験をしたら、一生立ち直れなくなってしまうのではないだろうか。高齢のおばあさんが復興に向かってあきらめずに立ち上がると言うのだから、自分はもっと勉強を頑張って少しでも復興の役に立つ人になりたい。僕はそう思いました。

あれから二年半以上がたち、中学生になった僕は、部活動や勉強に追われる毎日です。大人になれば忘れてしまう子どものころの思い出。でも決して忘れてはならない事が僕にはあります。それはあの時誓った自分の決意。また、沿岸部の人たちが以前のように笑って暮らせるよう僕は自分のやるべきことに精一杯取り組みたいと思います。